

佐渡の埋れ火

昭和四十三年八月二十五日

第一刷

定価 六〇〇円

著 者 水上 勉

発 行 者 上林 吾郎

発 行 所 株式 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
郵便番号 一〇二二
電話 東京二六五一

印刷 図書印刷
製本 中島製本
製函 加藤製函

万一落丁・乱丁の場合にはおとりかえいたします。

佐渡の埋れ火

目次	佐渡の埋れ火	北野梅花祭	銀の杖	ボコイの浜なす	あとがき
	5	113	153	191	248

裝幀
朝倉
攝

佐渡の埋れ火

1

「島根のすさみ」という書物は天保十一年の六月に、佐渡奉行をつとめた川路聖謨かわじとしあきむらという人が書いたものである。六月八日に奉行に任命された聖謨が、七月十一日に江戸を発ち、七月二十四日に佐渡へついて、翌年五月二十六日に江戸へ帰るまでの、約一年近い間の旅行と佐渡在島中の見聞を、留守宅の母に書き送った日誌風の記録である。私はこの書物を佐渡叢書という二巻に修められた覆刻本で読んだ。編者は山本修之助という、佐渡郡真野町新町の人である。山本氏は「島根のすさみ」の原本が、宮内庁の書陵部に秘蔵されてあったのを知って、一般に流布したいと考え、昭和三十二年一月に、宮内庁の許可を得て復刊したものの由である。私は、

この書をよむまで、著名な川路聖謨のことを知らなかった。読むうちになかなかの能吏であり、学者であることがわかった。島の風俗、島民の生活模様など丹念に書いているし、気候、地質、草木、動物など佐州の万般にわたって関心を示している。赴任する前年に鎮まった一国騒動のことやその跡始末に際しても、「佐州百姓騒立一件記録留」なる公式記録を書いているし、不況にあえぐ金山のこと、貧しい穿子かろこの労働ぶりなどもこと詳かに記述している。しかも為政者としてありがちな片寄った見方はしていなかった。客観的で、冷静で、観察はいつもするどかった。また、歌を詠むのが好きだったらしくて、管下の間歩まほ（金山の掘り場のこと）を視察しての帰りに、美しい夕焼雲に映える外海府の海など眺めては、幾首もの歌をのこしている。歌もみな母に詠み送ったのである。

御存じない方もあるかと思うので少しくこの川路聖謨のことにふれておくと、享和元年に豊後の国の日田に生れて、父を内藤吉兵衛といった。八歳の時に上京して、十二歳で小普請組川路三左衛門の養子になった。十八歳ではじめて支配勘定に出仕し、評定書留役、寺社奉行吟味物調役、勘定組頭、勘定吟味役など歴任して、天保十一年に佐渡奉行に任じられて、一年後に解任されると奈良奉行、大坂町奉行に榮進している。嘉永五年には勘定奉行として海防係の要職を兼ねたそうである。その間に「岐嶺路の日記」「濃役紀行」「長崎日記」「下田日記」「玉川日

記」「浪花日記」など多数の記録を残している。つまり、役人として赴任した先々の国のことどもを、見聞したまま捨て置くにしのびなくて、大事に書きのこしたものであろう。多忙な役職の身で、日を欠かさず記録にまとめることは、なまなかなことではなかっただろうが、性来筆まめなところがあつたとみえて、覆刻文だから多少は私などには判断しにくいところはあるものの、この書だけよんでもそれはよくわかるのだった。

私が「島根のすさみ」に興味をもったのは、天保の頃に佐渡で起きた百姓一揆のことが調べたかったのと、当時の金山の事情が知リたかったためである。佐渡の金山は、つい最近になって、国際通貨の変動から金ブームをよんだ影響だとかで、これまで死坑同然にして放ったらかしてあつたものが、またぞろ発掘する計画が進められているとか。このことも私は門外漢でつまびらかに知らないけれども、じつは、三年前の冬に一ど、去年の秋に一どと、再度の佐渡旅行を思いたち、むかしの奉行屋敷跡や、かなやま跡や、精錬所の跡などつぶさに見て歩いたところか、如何せん、往時の金山間歩かなやまぎの面影などしのぶすがもない荒れ果てた、草茫々の山肌や鉱業所跡だった。むかしは、遊女数百をかぞえ、繁栄をきわめたといわれる相川水金町なども、荒れ果ててしまっている。金座、銅座といわれた町なみも、大火のあとの安建築で、みすばらしい住宅街に変貌していて、私が訪ねたのはとくに二どとも秋末と冬であつたせいか、

町も山も人跡たえて荒涼としていた。そんな景色を漫然と見て歩いただけでは、いくら案内者が説明してくれても、むかしのかなやまがいったいどのような仕組みで、栄えたもののやら見当もつかなかった。それで、なにか文章や図面でもあればと、金山に関する古書などあさっているうちに、眼にとまったものが聖謨の「島根のすさみ」である。また「佐渡実記」の中の「替女口伝」なども眼についたが、「島根のすさみ」はとにかく日録であるから、天保十一年七月から、翌年五月末までの日々の天候や奉行の日常生活がたんねんに記されている。天保十一年は今から百二十八年も前で、百二十八年も前の一日の朝が、晴れていたか、曇っていたか、風がでていたかなど、克明にわかる記録はめずらしい。というより貴重といわねばならなかった。

「廿四日快晴。夜に入り少雨、たちまち晴、暑さはなはだし。正六時、赤泊出立いたし、一里半にて下河茂村勝泉寺へ上り、それより一里、新社高野にて野立ち、一里半にして新町宿にてひる休みいたし、それより一里十丁にて河原田町諏訪社前へ小休、一里余沢根本光寺へ上り小休、一里余にて中山峠茶屋にて小休、それより廿丁にて相川へ到着なり。今日提灯にて出立、払曉より途中の見物おびただしく、なかなか昨日の類にあらず。村々町々千をもつて数ふるになは余りありぬべし。佐州の風俗、越後信濃に近くして大いに劣れり。唐詩にいふところの紫髯緑眼の

類か眼の色ことなるもの多し。珍しきは老さびたる女にても多くあかねのてがらを用ひ、若く
いさめるとも申すべく、男に無紋白布の夏衣多くみゆ。女に紅木綿の湯具不用のものは至つて
少し。馬多くありて小にして弱く、牛またこれに類しぬ。鹿狐狼の類なし。狸貉汁ばかりなり
といふ。人も獸も風土もことならぬはなし。ただ鶏と猫は世の常なり。相川といふ所は赤泊よ
り五十町後ろは山、前は大海なり。人別じんべつ一万余といふ。道狭くして家つくりみ苦し（略）。八
右衛門が玄関の前三尺ばかり手前より下乗いたし、八右衛門次の間まで出迎へいたす。居間へ
参り面謁し到着の儀申し述ぶるすなはち退散の積りなりしが、八右衛門が三年こゝに居て勞し
候のみならず、少しく中風の病も出、かつ十一日頃より中暑にて打ち臥し、けふは某それがしが着の
うれしさに、押して髪結ひ月代さかやきそりたりとてよろこびながらよほどのはれ、面部手等にみえ、
さぞや心細からめとおもひしに不覚先立ちしは涙なりけり（略）。居間の庭は式百坪もあるべし、
北高く南低くしてその東の方より南へかけ候て、山かたちあり、さくら松等数多くうゑあり。
はゞ三間余に長さ二十間ばかりの蓮池ながめもありてことよろし、池魚多くみゆ。囲の塀の上を見
越して相川の町並み大海みゆる咏ながめことよろし。湯殿等ずゑぶんこゝろを用ひたりとみゆるな
り。囲の外は花畑と称し、そこには馬場も鉄砲矢場もありぬ、ひろきことしるべし。

白衣きしもの多きをみて、

白妙の夏衣せし山が今は今も昔の姿なりけり

庭の虫きゝて、

こゝろなやしばし忘れしふるさとを鳴く虫の音に思ひ出でぬる」

引用がずいぶん長くなりすぎたが、これは赴任した日、つまり七月廿四日のことを書いたくだりである。朝は快晴だったが、夜になって少々の雨となり、それも忽ちにしてやんで暑くなつた。相川にきて、奉行屋敷に到着すると、前任者の鳥居八右衛門が、中風の気で、寝ていたのを押して、髪を結い、さかやきを剃って、うれしそうに出迎え、老顔をしわばませるのを見て、自分も涙ぐんでしまった。奉行屋敷の庭はひろくて、池には魚もおり、湯殿もひろくて、

垣根の向うは、花畑、矢場もあり、眼下に相川の町なみが海につづいてひろびろと眺められる。白衣を着た男女が多いのが気になっていたのと、庭に虫がしきりと鳴くので、つい興をもよおして歌を詠んだ……というのである。江戸の母に送る書簡風の日誌であるから、武人らしからぬ感傷的なところもみえて、聖謨の人柄がにじみでていると思うがどうか。挿入されてある歌には、胸を打つものが多くある。同じ夜の作に、

鹿の音のなしとし聞くもたよりなり秋のたび寝のうさやすくなき

をしへ草わけてもうけん心あらば秋のゝきとすわれに告げてよ

はるばると江戸を出立して遠流の島についたその日の様子と心境を歌ったものの一部だが、江戸時代の奉行職が、任地へ到着するということは、県知事かそれともむかしの郡長の赴任と似ていたかもしれない。いや佐渡国は幕府の直轄地であったから、いまの地方長官よりは、もっと厳粛な赴任であったかもしれない。昔のことだからわからないことながら、史書によると、江戸出立の日は、同役の家来江戸詰の地役人等に送られて板橋の宿へきて、そこで目録二百疋、出入町人には南鐐一片ずつ配って、道中三国峠の明神に初穂をささげ、出雲崎を船出する際は、佐渡に報らせを送り、佐渡では待機していた小舟一艘が小木港に向い、船水主三十人のうち、半数が乗組み、船手役一人と残りの十五人は陸路で小木に赴いた。小木にある官船一艘を出雲崎へ向わせ、奉行の船が港へつくと、定番役、御目付番所役、本陣問屋などが総出で迎えている。相川から迎える者は広間役一人、目付役一人、地方役一人、町同心二人である。奉行はこの時、金二百疋ずつ、同心には百疋ずつ給与する。江戸から出雲崎までは旅籠代も払うが、赤泊からは支配地なので、木賃米代だけしか払わない。翌朝、奉行は赤泊から相川へ向う。この時、目付、伝役が新町に出迎え、同役と組頭が中山峠まで出迎える。奉行は駕籠である。陣屋玄関につくと、前任者に会って、定めの役屋へ入る。

このような赴任時の慣例的な様子も詳かにわかるのであるが、しかし、奉行や、島の役人た

ちの動きは大方わかるにしても、肝心の島民たちの動きは「島根のすさみ」には記述されていなかった。無理もないはなしで、聖謨は新任奉行だし、眼にうつったことだけしか記述していないのだから、島民たちがいったい、どのような動きで、聖謨を待っていたか。そのところを覗くことは出来ないのである。その点からいって、「島根のすさみ」はあくまで奉行日誌であって、天保の佐渡庶民誌ということとは出来ないだろう。

佐渡の歴史の中で、大騒動の一つだといわれた一国騒動のこと、当時かなやまにいたはずの無宿人のこと、穿子や大工をはじめとする零細農民の生活など、ことこまかに調べたくてもこの書物ではどうにもならない限界があつて、私は、天保の一奉行が江戸の母に送った日誌風の記録を尊重はしたけれども、一方では、他の記録もまた手あたり次第に探さねばならなかった。佐渡には、郷土史家や学者が多くいた。いろいろな史書もあった。すなわち、目にとまったものだけでも「佐渡風土記」「佐渡人物誌」「佐渡年代記」「佐渡大観」「佐渡金銀山史話」「佐渡実記」「佐越詳記」これだけある。しかし、これらの大半は農民、漁民、無宿者などの採鉱風景を一部に記述するだけにとどまり、専門的に書いたものではなかった。したがって、私の目的を達するためには、これらの諸本からかなやまに触れた部分を集めるしか方途がなかったわけである。中でも、「佐渡実記」という書物はいへん興味があつた。これは、鈴木清兵衛なる人の

集録した書物である。主文は、佐渡の僧侶や古老の口語りを記録したものだ、わけてもこのなかにあった「瞽女口伝」なる小記録は、私をいたく満足させるところがあった。川路聖謨が赴任してくる二年前の、すなわち天保九年の一国騒動のときに、煽動者の一人であった上八幡村の与三次という者の妻でおせきという女が、夫が役人に逮捕されて牢送りになってから間なしに、失明している。全盲となったおせきは、願ひ出て出島をゆるされ、当時高田藩下にあった瞽女屋敷に奉公し、段物や語りをおぼえて、三味線をならしながら諸国を遍歴する。のちにふたたび佐渡へ帰り、相川のはずれに瞽女屋敷を創設して、盲目の女たちを集め、古くからつたわる新穂の「のろま」人形遣いなどにもやとわれて、島内を巡業するのだが、記録は、その半生を、口述したものである。新穂村の鈴木清兵衛という人のことは詳しくは説明されていないのであるが、新穂村の住民だと奥書にあるところを見ると、いずれは、新穂村が発祥とつたえられる「のろま人形」の遣い手でもあったか。それとも語り手であったか、人形に関係していたことが文中にあるのでまがいなく、ところどころに伏字や誤記も多いけれど、「瞽女口伝」は盲目女が問わず語りに話した事どもを細記していておもしろい。おせきという瞽女は、自分だけのことばかりでなく、のち相川に住んでからのことや、まだ眼があいていた頃の、一国騒動の思い出なども多少は語っている。瞽女はご存じのように、江戸時代でも、最下層に属